

青い石とメダル

小川未明

青空文庫

犬いぬころしが、はいつてくるというので、犬いぬを飼かっている家うちでは、かわいい犬いぬを捕とられてはたいへんだといつて、畜犬票ちくけんひょうをもらつてきてつけてやりました。

しかし、かわいそうなのは、宿なしやどの犬いぬでありました。寒い晩ばんも、あたたかい小舎こやがあるのではないから、軒下のきしたや、森もりの中で、眠ねむらなければなりません。また、だれも、畜犬票ちくけんひょうなどをもらつてきて、つけてくれるものがなかったのです。

勇ゆうちゃんは、外そとを歩あるいているとき、いろいろの犬いぬを見みました。首輪くびわに、札ふだのついているのは、どこを歩あるいていても、安心あんしんだから、べつになんとも思おもわなかったけれど、なかには、首輪くびわのないもの、また、首輪くびわがあつても、札ふだのついていないものがありました。それらの犬いぬたちは、捨すてられたか、森もりや、空き家あやなかの中で生うまれたかして、まったく飼かい主ぬしのないものでありました。

しつかりした人にんげん間の助たすけを受けているものと、なんの助たすけもないものと、どちらがしあわせでありましょう？

「犬いぬころしに見みつかったら、いつ捕つかまえられてしまふかしれない。」と、勇ゆうちゃんは、札ふだのない犬いぬを見みるとあわれに思おもいました。そして、そのたびに、クロのことが、心配しんぱいでな

らなかったのでした。

勇ゆうちゃんの、かわいがっているクロは、やはり、宿無やどなし犬いぬであります。森もりの中なかで生まれ分ぶんのもらったお菓子かしを分わけてやったり、また、魚さかなの骨ほねがあれば、わざわざ持もってやつたり、平常ふだんから、クロをかわいがっていましたので、クロは、だれよりも、いちばん勇ゆうちゃんになついていました。

ほかの人ひとが、クロを呼よぶと、すぐ近ちかくまできて、尾おを振ふるけれど、けつして、頭あたまをなでようとしても、そばへはきませんでした。そして、注意ちゆういぶか深く、相手あいての顔かおいろ色いろをうかがっていました。勇ゆうちゃんが呼ぶと、勇ゆうちゃんだけには、安心あんしんしているとみえて、そばへ寄より、足あしもとへからだをすりつけました。そして、頭あたまをなでやると、目めを細ほそくして、クン、クンといつて喜びよろこました。だから、勇ゆうちゃんが、クロをかわいがるのも無理むりはありません。「ねえ、お母かあさん、クロを家うちの犬いぬにしてくださいませか。」と、勇ゆうちゃんは、たびたび、頼たのんだのであります。

いつも、お母かあさんは、こころよい返事へんじをしてくださいますでした。

「生きものを飼かうのは、めんどうです。しまいには、その世話せわを私わたしがしなければなりません

んから……。」と、おつしやいました。

「いいえ、お母さん！ 僕が、犬の世話をします。」と、勇ちゃんは、いいましたけれど、お母さんは、なかなかそれをお信じになりませんでした。

また、あるときは、勇ちゃんがしつこく頼むと、お母さんは、

「いつかも、おまえがそういつて、小鳥を飼ったことがあるが、その世話は、みんなお母さんがしなければならなかったじゃありませんか？ 小鳥とちがって、犬の世話は、私にできませんから。」と、おつしやいました。

勇ちゃんは、お母さんに頼んでも、望みがないと思いましたから、こんど、お父さんにお願ひしてみようと考えました。そして、お父さんが、承知してくだされたなら、そのときは、お母さんだつて、許してくださるにちがいないと思つたのでした。

「よう、お父さん！ クロをうちの犬にしてください。」

勇ちゃんは、役所からお帰りになった、お父さんの頸つたまにすがりついてねだりました。さすがにお父さんは、自分が子供の時分、犬や、ねこや、小鳥や、そうした動物がすきだったばかりでなく、飼つたことの経験があるので、頭からいけないとは、いわれませんでした。そして、クロという犬は、どんな犬だと、くわしく、勇ちゃんから、よ

うすをおききになりました。

勇ゆうちゃんは、知しるかぎり、クロのりこうなことを話はなしました。

「そりや、クロという犬いぬはりこうなんです。僕ぼくとならいつしよについてゆきますけれど、ほかの人ひとには、ついてゆかないのです。僕ぼくといっしよでも、すこし遠とほくへゆくと、さつさと独ひとりで帰かえってしまいます。自分じぶんに、鑑かん札さつがないということを知しっているんですね。」

こう、いいますと、お父とうさんは、うなずきながら、きいていられましたが、

「おまえのいうとおりです。しかし、そのクロばかりでありません。すべて野犬やけんはりこうなものです。だれも、保ほ護ごしてくれるものがないから、自分じぶんの気きを許ゆるさないのです。そして、生うまれから、野ので育そだった犬いぬは、家うちへつれてきてもいくものではないから、うちで飼かうなどと考かんえずに、おまえが、かわいがってやれば、それでいいのです。」と、お父とうさんは、論ろんされました。

なるほど、いつかないということが、勇ゆうちゃんにもわかったから、このうえ無む理りにお父とうさんにお願ねがいしても、むだだと悟さとつたのでした。

「しかし、犬いぬころしに見みつかつたら、つれていってしまわれるだろう……。」「と思おもうと、どうしたらいいだろうかと気きをもんだのでした。

晩に、森の方で犬のなき声がしたり、昼間でも、犬がやかましくほえて、あたりがなんとなく騒がしく感ぜられると、犬ころしが、やってきたのでないかしらん、そして、クロが、つかまつたのでないかしらんと、胸がどきどきしました。勇ちゃんは、外へ飛び出していつて、クロの姿を見るまでは、安心されなかったのです。

ある日、勇ちゃんは、徳ちゃんが、銅製のメダルを持つているのを見ました。そのメダルは、ちょうど、畜犬票が、古くなったような、大きさも、色合いも、そっくりでありましたので、もしこれを犬の首輪にぶらさげておいたら、だれの目にも、畜犬票と見えるであろうと思いました。

「徳ちゃん、そのメダルを、僕にukれない？」

と、勇ちゃんは、いいました。

徳ちゃんは、目をまるくして、驚いたというようなうすをして、

「これは、僕、やつと人からもらった大事なやつなんだぜ。デッドボールの優勝メダルだからな。」と、徳ちゃんは、答えました。

「なにかと交換しようよ。」と、勇ちゃんは、いったのです。

「どんなもの？」

「万年筆と……。」

「いつかのかい、あんなものはいやだ。だってプラチナがなくなつて、そのうえ、こわれているんじゃないか？ あんなもの、字なんか書けやしないもの。」

「じゃ、僕の持つているもので、なんでも、君の好きなものと換えてくれないか。」

勇ちゃんが、こういうと、徳ちゃんは、メダルを勲章のように、自分の胸のあたりにつけるまねをしてみせました。

「いつか、僕に見せた、あの青い石となら、換えてもいいよ。」

ややしばらくしてから、徳ちゃんが、こう答えました。

「あの、僕が、田舎から持ってきた、青い石かい？」

こんどは、勇ちゃんが、目をまるくしたのです。

「ああ、あの青い石となら、換えてもいいな。」と、徳ちゃんは、勇ちゃんの顔を見ました。

「あの、青い石は、大事なんだがなあ。」と、勇ちゃんは、考えていました。

「あの石でなければ、僕も、いやだ！」と、徳ちゃんが、いいました。

「万年筆だといいいのだから……。君、万年筆では、だめかい？」

「あんな、君^{きみ}んちの、姉^{ねえ}さんの持^もつていた、お古^{ふる}なんかいやだ。」

「じゃ、青^{あお}い石^{いし}と換^かえようよ。」と、勇^{ゆう}ちやんは、メダルがほしいばかりに、つい決^{けつ}心^{しん}しました。

「ああ、換^かえよう！」

徳^{とく}ちやんは、青^{あお}い石^{いし}が、前^{まえ}から、ほしかつたので、につこりしました。勇^{ゆう}ちやんは、自^じ分^{ぶん}の家^{うち}へ青^{あお}い石^{いし}を取^とりに駆^かけてゆきました。

この、青^{あお}い石^{いし}というのは、勇^{ゆう}ちやんが、夏^{なつ}休^{やす}みに、遠^とい北^{きた}のおばあさんのところへい
つたとき、垣^{かき}根^ねのきわの、道^{みち}の上^{うへ}に頭^{あたま}を出^だしていたのです。あまりに、青^{あお}くて、きれいだ
つたので勇^{ゆう}ちやんは、棒^{ぼう}きれでいっしょうけんめいに、その石^{いし}を掘^ほり出^だしました。そして、
野^のばらの咲^さく里^{さと}川^{かわ}で、その石^{いし}を洗^{あら}いました。石^{いし}は水^{みず}にぬれると、空^{そら}の色^{いろ}よりも、もっと
青^{あお}い色^{いろ}をしていました。

勇^{ゆう}ちやんといっしょに、青^{あお}い石^{いし}は、暗^{くら}い長^{なが}い、トンネルを汽^き車^{しゃ}で通^{とお}つて、知^しらない他^た国^{こく}
へきたのでした。そして、知^しらない町^{まち}の空^{そら}の下^{した}で、じつと太^{たい}陽^{よう}を見^み上げました。石^{いし}は、
ものをいいませんが、どんなに心^{こころ}細^{ほそ}かったかしれません。勇^{ゆう}ちやんが、この大^{だい}事^じな石^{いし}
を、友^{とも}だちに見^みせると、

「いい石いしだなあ。」と、良りちゃんも、徳とくちゃんも、善ぜんちゃんも、ほめたのでした。

それから、勇ゆうちゃんは、石いしをひきだしの中なかにいて、ときどきだしてみました。この石いしを見みるといつでも、田舎いなかのおばあさんの顔かおや、おばあさんの家うちのいけがきや、白しろい野のばらの咲さいている里川さとかわの景色けしきが、ありありと浮うかんで見みえたのでした。

しかし、青あおい石いしよりは、クロの命いのちのほうか、はるかに大だい事じであつたからです。勇ゆうちゃんは、石いしと取とり換かえたメダルをクロのくびにつけてやりました。そのためか、あるいは、クロがりこうで、用心ようじん深ふかかつたためか、ほかの野犬やけんが、幾いくひきも捕つかまえられていつたのに、クロだけは、無ぶ事じでありました。

「あんなに、勇治ゆうじが犬いぬをかわいがるのだから、ほんとうの鑑かん札さつを受うけてやろうか。」と、ある日ひ勇ゆうちゃんのお父とうさんは、クロが喜よろこんで、勇ゆうちゃんに飛とびついていようすを見みて、こわいわたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 8」講談社

1977（昭和52）年6月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「青空の下の原っぱ」六文館

1932（昭和7）年3月

初出：「婦人倶楽部」

1932（昭和7）年1月

※表題は底本では、「青《あお》い石《いし》とメダル」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：藤井南

2015年12月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青い石とメダル

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>